

中学生の「乳幼児との触れ合い体験」における家族機能の理解と育児力養成に関する研究
Study on Understanding of Family Function and Child-rearing Training Experience in Infancy Stage
Education and Care on Junior High School Students

永田夏来、加納史章、村田晋太郎
Natsuki NAGATA、 Fumiaki KANOU、 Shintaro MURATA

Abstract

本研究は、「乳幼児との触れ合い体験」等によって育児力がどのように育成されるかの測定と評価が主な目的となる。研究の方法として、兵庫教育大学附属中学校で行われた平成 29 年度キャリア総合選択授業で「家族と地域について考えよう（家庭科）」を実施し、その教育効果を測定する。測定方法は、育児力を測定する調査票を実践の事前、中間、事後で行った。また、ワークシートに学習の振り返りなどを毎時間記述させ、質的な学習効果を見取ることとした。加えて、体験中の様子などを動画撮影し、生徒の振る舞いについても観察した。本稿ではこのうち事前、事後のアンケートを中心に「育児力」の変化について論述する。具体的な「家族と地域について考えよう（家庭科）」の単元構成は、(1)家族の機能や育児について考える、(2)子育て支援ルーム「かとう GENKi」の訪問や保護者と乳幼児を招待する体験活動、(3)相互評価、となっている。

研究の成果として、子育て支援施設を訪問して行う「触れ合い体験」に保護者や施設担当者との交流を加えることは、育児や子育ての厳しさを知りながらも子供への関心を維持し、将来的な出生への意欲を向上させる効果が期待できる点が示唆された。

キーワード：乳幼児との触れ合い体験、中学生、育児力、家族機能

Key words : Experience in Infancy Stage Education and Care, Junior High School Students,
Child-rearing Training, Family Function

1. 研究の背景及び目的

本研究は、「乳幼児との触れ合い体験」等によって育児力がどのように育成されるかの測定と評価が主な目的となる。調査票による事前、事後の育児力の測定、ワークシートなどを用いた経過の観察、「乳幼児との触れ合い体験」における動画撮影などを行い、実践と学習の効果を複合的な把握を行った。また、育児力を身に付けることと、保護者や乳幼児が安心して「触れ合い体験」に協力できる環境整備についての検討も合わせて念頭に置かれている。

平成 20 年学習指導要領改訂により、「中学校技術・家庭」では様々な具体的な改善がなされた。例えば、「家庭の機能を理解し、人とよりよくかかわる能力の育成を目指した学習活動を一層充実する。また、幼児への理解を深め、子供が育つ環境としての家族と家庭の役割に気付く幼児との触れ合い体験などの学習活動を更に充実する(p.5)」がその一つである。幼児との触れ合い体験が明記されたことにより、実践者自身の関心も高まり、村田ら(2017)の調査によると、平成 20 年改訂以後に中学校の家庭科教育が執筆した研究論文『理論と実践』において保育関連の内容が多く掲載されていることがわかっている。一方で、学習効果についての言及が少ないことも明らかとなっており、実践への関心や実施は高まっているものの、生徒をどのように見取っていくかについては課題が残されている。そこで、本研究では、調査票を用いて生徒の「育児力」について事前、中間、事後の三回測定し、客観的な評価を試みる。また、ワークシートにおける生徒の記述について分析・動画撮影によっての生徒のパフォーマンスなど、質的な学習効果についても検討を行い、複合的な効果測定を行うデータを収集した。

「育児力」については、様々な定義がある中で、「現実の子供を見、感じとっていくなかで学び、はじめて獲得できるもの」(藤村・伊藤、1990)とする。藤村らは「子供を育てながら自分を育てていくこと」、そして、「人とのかかわりのなかで育つこと」を示唆しているが、決して親と子供だけに限られたものではない。それは、近年、中学生から大学生を対象とした乳幼児親子との取り組みが数多く行われていることから明らかである。また、育児とは「乳幼児を育てること(新村、2018)」であることから、今回の体験と合致すると考える。

2. 方法

(1) 対象及び期間

本研究の対象は、兵庫教育大学附属中学校で行われている平成 29 年度キャリア総合選択授業で「家族と地域について考えよう（家庭科）」を選択した、2 年生・3 年生 16 名である（女子 15 名・男子 1 名）。キャリア総合選択授業とは、中学校におけるキャリア発達の促進を図るための教育課程として位置付けられ、キャリア教育の諸理論に基づきながら、社会的自立に向けて育成すべき基礎的・汎用的能力と関連づけた選択授業の内容を吟味し、生徒が興味・関心を持って学習活動を継続させられるテーマで構成している。平成 29 年度は、A. サイエンス・心理部門、B. 人文・言語、C. ものづくり・心と体づくりの 3 部門から 13 講座が展開された。実施日時は、5 月から 10 月まで（夏季休業を除く）の火曜日の 3 校時（10：50～11：40）の 50 分授業を計 15 回である。

（2）子育て支援ルーム「かとう GENKi」

施設との連携として、兵庫教育大学就学前カリキュラム研究開発室子育て支援ルーム「かとう GENKi」（以下、かとう GENKi）に協力を依頼し、了承を得た。かとう GENKi は、①0 歳児～就学前、さらに小学校までの連携を含めた教育・保育内容の開発、②地域拠点としての子育て支援のあり方の検証、③就園前の乳幼児親子が安心して集える場の提供、大学の資源の有効活用による地域貢献を設置の目的としている。GENKi の由来は、「G」…Generation、「E」…Education、「N」…Nursery、「Ki」…Kids の頭文字からなり、また、平成 29 年度より、加東市から地域子育て拠点事業の委託を受け、名称を「かとう GENKi」と改名し、より地域のコミュニティとして親子が利用しやすい環境が整えられている。

附属中学校との交流については、家庭科同好会とのつながりがあるが、授業での取り組みは今まで行われてこなかった。また、かとう GENKi としても、保幼小との接続を重視する一方で、中学生との関わりは新鮮であると同時に、利用している親子にとっても新たな刺激になったという。例えば、保護者の中には、保育所や幼稚園もそうであるが、小学校、そして中学校と子供の先を見据えて不安を抱いていることがある。今回の触れ合い体験を通して、保護者自身が子供の成長した姿を中学生に重ねて考えることができたとの感想があり、保護者にとっても得られるものがあつたと考えられる。（保護者が何を得心したかについては、今後の課題として検討する価値は十分にあるといえる）。

（3）実践の内容

到達目標として、1)日常生活を見直し、家族や家庭の機能について客観的に考える、2)親子の関わりや触れ合いを通し将来について考え、育児力を養成する、3)地域との連携をはかりながら、実践的な力を身につける、の 3 つを掲げ、さらに、中学生が子育て支援ルームに出向く形で行う「乳幼児との触れ合い体験」、「保護者との触れ合い体験」及び、中学生が自ら企画して乳幼児と保護者を中学校に招待する「乳幼児・保護者との触れ合い体験」を中心とした構成である。主な実践内容を Table1 に示す。

Table1 主な実践内容

実施日		活動計画
事前学習	5 月 09 日	家庭での日常生活を見直してみよう
事前学習	5 月 16 日	家族の機能を考えよう
事前学習	5 月 23 日	育児について考えよう
事前学習	6 月 06 日	子育て支援ルーム「かとう GENKi」の紹介
触れ合い体験	6 月 13 日	かとう GENKi 見学：子供とふれあおう
触れ合い体験	6 月 27 日	かとう GENKi 見学：保護者のお話を聞こう
中間学習	7 月 04 日	見学を踏まえ、招待プログラムを考えよう
触れ合い体験	7 月 11 日	かとう GENKi の子供たちを招待しよう
事後学習	9 月 26 日	全体評価・相互評価

事前学習は、“育つ”というキーワードを軸に、家族機能の確認、乳幼児の発達段階、子育て支援ルームの紹介、乳幼児と接する際の注意事項などを説明すると同時に、グループワークやワークシート（Fig.1）を活用し、生徒の学習意欲と理解向上に努めた。触れ合い体験では、かとう GENKi を利用されている乳幼児及び保護者の了承のもと、乳幼児との触れ合い、保護者への子育てに関するインタビューを行った。さらに、中間学習を踏まえて、乳幼児及び保護者との交流から家族や子育てについての考察を深めた後、附属中学校に親子を招待し、中学生が考案した企画から、再度関わりによる学びが得られるようにした。

- ・ 子供の中には感情をまだ上手に表現できない子や手の力が弱い子もいるので、その子に合う取り組みが重要と思いました。

○ 保護者のお話を聞こう

事前の宿題として、中学生に保護者へのインタビュー内容を考えてきてもらい、それを受けて体験を実施した。前回の託児体験からあまり日数が経っていないことから、乳幼児親子も中学生のことを覚えており、家庭での子供の様子や子育てについて、詳しく話を聞くことができていた。また、Fig.2 にもあるように、その日は父親も子供と一緒に子育て支援ルームに来ており、また違った視点の意見を聞くことができた。特に、子供を育てることは、既述したように、楽しさだけでなく、難しさや大変さを保護者から語られることで、深く考える機会になったのではないだろうか (Table3)。

Table3 生徒の感想の抜粋 (保護者のお話を聞こう)

- ・ 赤ちゃんは話せないので、自分が様子を見て、赤ちゃんがどうしたいのか考えて、行動しないといけないから大変。
- ・ やっぱり何もかも初めてなので、何が1番正しいのか、手探りで見つけないといけないことが大変。
- ・ 自分の思った通りの時間に行動できない。
- ・ 子育ては大変だけど、子供の成長を身近で見れるし、自分も成長できる。

○ かとう GENKi の子供たちを招待しよう

中間学習では、グループで親子の様子を語り合い、そこから、中学校へ招待するためのプログラムを考案した。そこには、保護者からも一度中学校を見学してみたいという要望があり、ニーズが一致した形となった。中学生は、中学校の案内と触れ合い体験について、乳幼児を対象としていることから、親子で参加できるよう、また注意することなどを自分たちで考えていた。体験当日には、自分たちの取り組みで親子が笑顔になったことを受け、更なる学習効果につながったと考えられる (Table4)。

Table4 生徒の感想の抜粋 (かとう GENKi の子供たちを招待しよう)

- ・ 子供は遊ぶとき、そのおもちゃの特徴を理解している。
- ・ 初めてのときは、お互いに距離があったけど、2~4回と会うと、お互いに慣れてきて、「一緒に遊ぼう」と手をひっぱってくれることがとても嬉しかった。
- ・ 子供とふれあうときは、自分が変顔したり、人形で遊んだり、学校の自分を捨てて、自分も子供になった気分で接すると子供も笑顔になる。

3. アンケートの作成及び結果の分析

本研究では、事前、事後の育児力の測定、ワークシートなどを用いた経過の観察、「乳幼児との触れ合い体験」における動画撮影などを行い、実践と学習の効果を複合的な把握を行っている。本稿ではこのうち、事前と事後のアンケートを取り上げ、実践の前後で「育児力」についてどのような変化が見られたかを実証的に把握するための基盤を確認しておきたい。

これまで行われてきた幼児への共感的応答性に関する測定項目としては、全13項目からなる「幼児への共感的応答性の尺度」(伊藤・倉持・岡野・金田、2010)がある。今回はこれをもとに1)小さな子供に興味がある、2)子供を育てることは、やりがいのある仕事だと思う、3)赤ちゃんが好きである、4)将来、自分が親になることなんて、考えたこともない、5)子供がいる家庭は、子供がいない家庭よりも楽しいと思う、6)小さな子供の面倒をみたり、遊んだりするのはめんどくさい、7)親となって子供を育てると自由な時間がへって自分の好きなことができないと思う、8)将来、親となって子供を育てたい、以上8項目を用いて調査を行った。また、本実践がキャリア教育の一環であることを踏まえ、これからの人生設計に関するビジョン(「将来子供を育てたい」への賛否)および乳幼児へのイメージの変化(「赤ちゃんが好き」「小さい子供は面倒くさい」「子供がいる家庭は楽しい」への賛否)も合わせて測定している。さらに、実践の効果と授業外の家族経験による影響を区別するために、兄弟・姉妹数や日常的な乳幼児との接触頻度に関する項目も設けた。

今回使用するのは、事前調査(実施日5月9日、n=16)および事後調査(実施日9月26日、n=13)である。

授業途中で転校や履修変更などが生じたため、3件の脱落が生じている。今回調査はプライバシーの観点から個票による個人の区別は行わない前提で設計されているため、事前・事後調査のデータをそのまま集計しデータとして分析した。

○ 生徒の生活状況

事前調査の時点では第一子の割合が最も高く 56.3% (n=16) である。事後調査では 46.2% (n=13) とやや下がるものの、基本的には長男・長女が今回の実践には多く参加している。9 割以上の者が親と同居しているが、祖父母と居住しているものは共に 1 割未満である。世帯人員数の中央値は 5 となっており、自分と親、きょうだいからなる核家族世帯で居住している者が多いとみなすことができるだろう。日常生活における乳幼児との接触頻度については「毎日ある」「時々ある」としたものが事前調査では 75.1% (n=16)、事後調査では 69.2% (n=13) と高い数字を示しており、そもそも弟や妹などを通じて乳幼児と積極経験を持つものが、家族についてさらに知りたいと考えて本実践に参加しようと考えたともみることができそう。

○ 将来の見通しについて

「以下のようなことについて、あなたは普段どのくらい考えていますか」という設問を用い、将来の見通しについて、1) よく考える 2) ときどき考える 3) あまり考えない 4) 全く考えない、の 4 件法で尋ねた。このうち 1) 2) を「考える」、3) 4) を「考えない」とした上で事前事後の区別を加えて表としたものが Table5 である。「進みたい学校」「就きたい職業」「住みたい場所」「結婚相手」については実践前後でそれほど大きな変化は見られなかったが、「子育て」については事前では「考える」としたものが 48.0% (n=16) であったのに対して事後では 61.6% (n=13) と 13 ポイントの上昇が見られ、学習を通じて「子育て」考える機会については一定の成果が見られることが示唆されている。

Table5 人生設計のビジョンについて

		考えない	考える
1) 進みたい学校	実践前(n=16)	12.5%	87.5%
	実践後(n=13)	7.7%	82.4%
2) 就きたい職業	実践前(n=16)	31.3%	68.8%
	実践後(n=13)	30.8%	69.3%
3) 住みたい場所	実践前(n=16)	56.3%	43.7%
	実践後(n=13)	53.8%	46.2%
4) 結婚相手	実践前(n=16)	68.8%	31.2%
	実践後(n=13)	69.2%	30.8%
5) 子育て	実践前(n=16)	50.0%	50.0%
	実践後(n=13)	38.5%	61.5%

○ 「育児力」の測定

幼児への共感的応答性を見るために設定した 8 項目について 1) そう思う 2) ややそう思う 3) 分からない 4) あまりそう思わない 5) そう思わない、の 5 件法で調査を行った。最終的には全てを得点化した上で「育児力」を従属変数とし、生活状況などを独立変数として回帰分析を行う必要があるが、本稿では「育児力」測定項目の特徴を検討するために事前・事後を区別した上でクロス表として Table6 に結果を示した。

今回の授業は選択式であるため、そもそも子供や家族に関心がある生徒が集まっている。1) 小さな子に興味がある、2) 育児はやりがいがある仕事だ、3) 赤ちゃんが好き、5) 子供がいる家庭は楽しい、といったについては事前事後ともに約 7 割以上の生徒が「そう思う」と回答しており、そもそも持っていた育児や子育て、子供に対してポジティブな印象が実践後も維持されているとみなすことができるだろう。

反面、育児や子供に対するネガティブな項目 6) 小さい子供は面倒臭い、7) 自由な時間が減るについては実践前後で数字の変化が見られている。6) 小さい子供は面倒臭い、については事前では 68.8% が「そう思わない」と回答しており、子供に対するネガティブな印象に対しては強く反対する意見が多く支持された。しかし事後における「そう思わない」は 46.2% と事前に比べて 20 ポイント以上の減少が見られており、ネガティブな印象に反対する意見を持つものが少なくなったものと見られる。7) 自由な時間が減る、についても同様に、意見の変

化が見られている。事前では「ややそう思う」という消極的な肯定が43.8%と最も多く「そう思う」とした者はいなかったのに対し、事後では「ややそう思う」が15.4%と30ポイント近く減少したのに加えて全体の三分の一に当たる30.8%が「そう思う」と回答している。

しかしながら、8) 将来子供を育てたいについては事前では62.5%であった「そう思う」とした者が事後では84.6%と20ポイント以上上昇している。育児や子育て、子供について「甘くない」という認識は強めつつも子供を持つことに対する意欲自体は全体として向上しており、子供に対してそもそも持っていたポジティブな印象は維持されるという結果となった。

Table6 「育児力」測定結果

		そう思う	ややそう思う	分からない	あまりそう思わない	そう思わない
1) 小さな子に興味がある	実践前(n=16)	75.0%	25.0%	0.0%	0.0%	0.0%
	実践後(n=13)	69.2%	30.8%	0.0%	0.0%	0.0%
2) 育児はやりがいがある仕事だ	実践前(n=16)	75.0%	18.8%	6.3%	0.0%	0.0%
	実践後(n=13)	69.2%	15.4%	7.7%	0.0%	7.7%
3) 赤ちゃんが好き	実践前(n=16)	81.3%	12.5%	6.3%	0.0%	0.0%
	実践後(n=13)	84.6%	7.7%	7.7%	0.0%	0.0%
4) 親になるなんて考えたこともない	実践前(n=16)	6.3%	18.8%	43.8%	6.3%	25.0%
	実践後(n=13)	15.4%	0.0%	30.8%	38.5%	15.4%
5) 子どもがいる家庭は楽しい	実践前(n=16)	75.0%	18.8%	6.3%	0.0%	0.0%
	実践後(n=13)	76.9%	7.7%	0.0%	7.7%	7.7%
6) 小さい子供は面倒臭い	実践前(n=16)	0.0%	0.0%	12.5%	18.8%	68.8%
	実践後(n=13)	0.0%	0.0%	7.7%	46.2%	46.2%
7) 自由な時間が減る	実践前(n=16)	0.0%	43.3%	6.3%	31.3%	18.8%
	実践後(n=13)	30.8%	15.4%	7.7%	38.5%	7.7%
8) 将来子供を育てたい	実践前(n=16)	62.5%	25.0%	12.5%	0.0%	0.0%
	実践後(n=13)	84.6%	15.4%	0.0%	0.0%	0.0%

4. 結論・今後の課題

家庭科分野における乳幼児との「触れ合い体験」は、子育ては楽しい、子供は可愛いという一面にのみ着目してしまい、子育ての難しさや大変さについて語られることが少ないという指摘もある。しかし今回「乳幼児との触れ合い体験」、「保護者との触れ合い体験」及び、中学生が自ら企画して乳幼児と保護者を中学校に招待する「乳幼児・保護者との触れ合い体験」を中心とした学習を構成した結果、ただ訪問して行う「触れ合い体験」に保護者や施設担当者との交流を加えることは、育児や子育ての厳しさを知りながらも出生への意欲を向上させる効果が期待できる点が示唆されたものと言えるだろう。ただし、今回はあらかじめ育児や子供に関心が高い生徒を対象とした実践であったため、データにも制約がある。今後の課題としては、今回の分析結果をより精査することに加え、より幅広い生徒を対象とした実践を試みる必要があるだろう。

引用文献

文部科学省、2008、「中学校学習指導要領 技術・家庭 解説編」
 村田晋太郎・山本亜美・永田夏来、2017、「実践論文に見る中学校家庭分野「家族」教育の現状と課題-全日本中
 藤村美津・伊藤雅子、1990『育児力 子供の成長・おとなの成長—子供の成長・おとなの成長』、筑摩書房
 学校技術・家庭科研究会機関誌「理論と実践」を対象として-」『日本家庭科教育学会誌』Vol.60、No.1、pp.24-30
 伊藤葉子、2003、「中・高校生の親性準備性の発達」『日本家政学会誌』Vol.54、No.10、pp.13-24
 伊藤葉子・倉持清美・金田利子・岡野雅子、2010、「中・高・大学生の幼児への共感的応答性の発達とその影響
 要因」『日本家政学会誌』Vol.61、No.3、pp.1-8
 伊藤葉子、2007、「中・高校生の家庭科の保育体験学習の教育的課題に関する検討」Vol.58、No.6、pp.315-326
 岡野雅子・伊藤葉子・倉持清美・金田利子、保育学習の効果—幼児への関心・イメージ・知識・共感的応答性の
 変化とその関連—、Vol.63、No.4、pp.175-184
 新村出編、2018『広辞苑【第7版】』、p.144、岩波書店